

特集 真鶴の小松石 ～真鶴の石材業について～

真鶴半島は、十数万年前の火山の噴火により噴出された安山岩が堆積して出来上がっています。

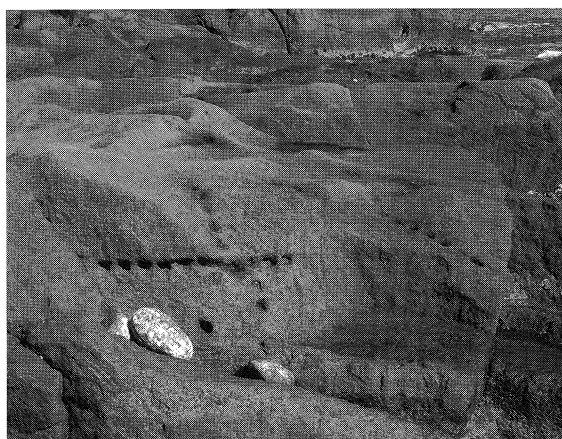
これらの安山岩は良質の石材として、真鶴では「本小松石」、「新小松石」の二種類の石が産出され、古くは鎌倉時代には鎌倉の都市整備や社寺建築のため、真鶴付近の石が石材として用いられました。

また戦国時代以降は、城郭建築が関東一円に広がったこともあり、真鶴の石材業は大きく発展しました。

江戸時代に入って、江戸城築城、修復工事のため、真鶴から大量の石が供給され、その後も江戸幕府の命により、徳川御三家（尾張・紀州・水戸）や松平家、黒田家などの各大名が真鶴の各所に丁場（採石場）を開きました。そこから石を切り出して、江戸へと運ばれていきました。

現在、町内には、この頃の石碑や刻印石、矢穴石等が残っていて、隆盛を極めた、当時の真鶴の石材業をうかがいしることができます。

真鶴で産出された石は、大正天皇



真鶴の海岸に残る矢穴石

や昭和天皇の陵墓造営用石材として使用され、今日では、河川工事等の建築用材、個人宅の石垣や墓石、石碑の材料としても使われています。このように、石材業は、町の基幹産業として、長年に亘って町の経済を支えてきました。今回の文化財だよりの特集では、県立歴史博物館の丹治学芸員、県立生命の星・地球博物館の山下学芸員にご寄稿いただき、真鶴の石材業を多角的な角度から見ていきたいと思います。

目次

特集 真鶴の小松石

～真鶴の石材業について～

真鶴の石材業の歴史を辿る

文化財審議委員会委員 三木 宏

..... 2

明治時代の真鶴町域の

石材業と土屋大次郎

神奈川県立歴史博物館

学芸員 丹治 雄一

..... 3

真鶴の生い立ちと石

神奈川県立生命の星・地球博物館

学芸員 山下 浩之

..... 4

石から辿る真鶴の石材業

真鶴町教育委員会 主査 新井 人志

..... 5

文化財トピックス..... 7

民俗資料館の開かずの

金庫が開きました！

..... 7

文化財審議委員会研修視察報告

..... 7

令和元年度文化財保護事業

..... 8

真鶴の石材業の歴史を辿る

三木 宏(町文化財審議委員会委員)

町の基幹産業として発展し、現在に至る石材業は、石を石碑や墓石等に加工する日常生活・信仰関係のものと、建築や土木工事に関するものとに大別することができる。古くから石材の産出は、県内では特に小田原以西の根府川から真鶴岬にかけて相模湾沿岸の地域で行われたものが有名であった。この地域が石材の産地となったのは、良質の石材山があったことと同時に、それが海に近接しており、石材の搬出輸送に海運が利用できるという自然条件によるところが大きかった。



宝篋印塔

瀧門寺山門前 明和4年(1767)建立

この石材加工技術を歴史的にみると、関東にある五輪塔・宝篋印塔などの鎌倉時代の石塔の秀品は、仏教の広まりと同時に奈良の石工の棟梁によって優れた技術がもたらされたためであった。

その後、石材生産は小田原北条氏治下の時から大々的に行われたと言われるが、石切と称せられた石工は、人々の日常道具や石塔の製作、建築の根石の切り出し、城郭の石工事など幅広い仕事を行っていて、軍事的にも重視すべき存在であったことは所領を与えられて家臣に加えられていることから想像できる。

しかし、その最盛期はなんといっても江戸・小田原等をはじめ各地で城普請・寺社造営が盛んに行われた近世初

期であった。小田原北条氏に仕えて、後に徳川家康にその技術を見出された小田原の石屋善右衛門は、徳川氏より扶持米給与や地代免除などの厚い保護を与えられ、多くの石工を従えて天正年末から寛永七年(一六三〇)まで江戸にあって城普請等に活躍している。ちなみに日本橋本小田原町は、慶長年間江戸城修築の時、石屋善右衛門が、石船やその他の船で相模の石材を河岸揚げしたこと、小田原河岸といわれるようになり、それが町名の由来であるという。

真鶴の採石は、土屋格衛が京都方面から保元・平治の乱を逃れて岩村に來たことに始まるとされているが、時代の下った江戸時代、真鶴や岩を中心とする石材生産の村「石方六か村」が成立し、切り出した石材は、築石・板石・四面塔石・仏石・花石等として江戸で売り出したが、大量の需要がなくなり衰退の傾向をたどるようになる。当時の石材業の状況を以下の資料から読みとることができる。

『元禄四年九月 足柄下郡岩村産出堅石につき上申書』(二六九二)

『宝永八年 足柄下郡岩村・吉浜村岩沢山丁場争論のつき門川村名主等扱証文』(二七二一)

『享保十年五月 足柄下郡根府川村他五村伊豆国宇佐美村石切出しにつき禁止方願書』(二七二五)

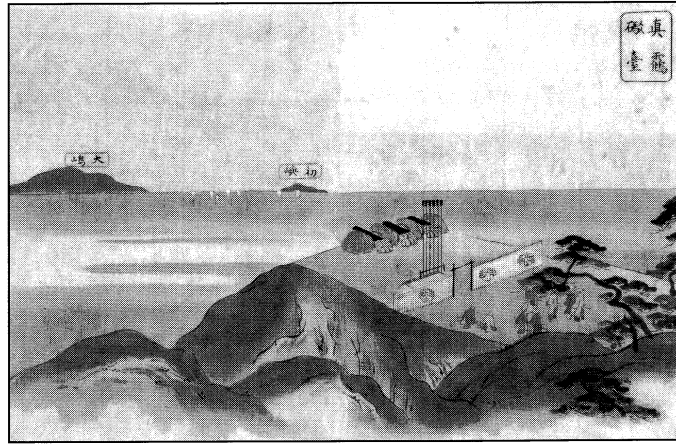
『寛延二年五月 吉浜村・鍛冶屋村・岩村石丁場争論裁許状』(二七四九)

資料を要約すると、岩村の名主・組頭等が出した上申書には、かつて石材需要が多く石切丁場が五十六、七か所あって、切り出した石材は加工され江戸に売り出したが、その後だんだんと石材需要が減り、今では石切丁場が三十四か所になってしまったという苦境や、丁場の境界線騒動、はたまた「石方六か村」産石材と偽っての石材販売禁止願いなど、当時の石材業者の現状を垣間見ることが出来る。

その後、幕末に至り、異国船渡来による江戸湾防備のための台場建設に関連して、石材の需要が増大するものの、これもわずかの期間で終わったようである。

写真は『近海見分之図』に描かれた真鶴の砲台である。『近海見分之図』は嘉永三年(一八五〇)、幕府は勘定奉行らに江戸近海の防備状況の見分を命じ、絵図は同行した絵師によって描かれたものと推定される。総計一〇七図に及んでいるが、これには岩の長坂の図もある。見分衆の提出した詳細な

復命書や絵図などからみると、江戸近海には数多くの砲台が設けられていたのであるが、三年後にペリーが来航したときには、ほとんど効果をあげるこ



真鶴砲台図 神奈川県立歴史博物館蔵

ペリーの率いる「黒船」が浦賀に来航するなかで、日本の近代化への幕が切って落とされたことは、よく知られている。それは、日本の国家に近代化をもたらすことを予測させる鐘の響きであるとともに、人々に驚きと社会変化をよびおこす出来事であった。

しかし、その後の近代国家建設にあつての石材業は、まさに時代の求めに

応じたものであつた。その歴史の中で、それぞれの時代の要求に技術力で呼応し、何らかの関わりをもつて生きていった先人たちに敬意を表します。

明治時代の真鶴町域の 石材業と土屋大次郎

丹治 雄一（神奈川県立
歴史博物館学芸員）

町民のみなさんは、岩海岸の近くにある「真鶴町民俗資料館」をご存じのことと思います。令和元年七月に真鶴町が資料館の土地・建物を取得して、今後のさらなる活用が期待されるころですが、ここはかつて、真鶴・岩をはじめとする箱根山周辺で採掘された石材に関わる事業を手がけた土屋家の住宅でした。建物の一部は、大正二年（一九一三）九月一日に発生した関東大震災で被災して、昭和初年に改築されていますが、玄関部分や土蔵などは明治二五年（一八九二）に建てられたままで現存しています。この住宅が建てられた明治時代の土屋家の当主は、土屋大次郎という人物でした。以

下、真鶴町域の明治時代の石材業を語る上で欠かすことのできない土屋氏の事績をたどってみましょう。

土屋氏は、安政四年（一八五七）に相模国足柄下郡岩村（現真鶴町）の石工、武川半三郎の二男として生まれ、のちに土屋家の養子となり、「土屋商店」を開業して石材の採掘・輸送・販売・施工などの事業を行った石材企業家でした。土屋氏がその事業活動の前半期におもに扱ったのは、地元産の石材でした。本誌の神奈川県立生命の星・地球博物館の山下さんの記事にも、「本小松石」「新小松石」という石材名が出ています。町民の方には言わずもがなのことですが、JR東海道線より山側で採掘されているのが高級墓石用としても有名な「本小松石」で、東海道線よりも海側でかつて採掘されていたのが「新小松石」です。この「本小松石」や「新小松石」を含む箱根山周辺で採掘された石材は、江戸時代以降「相州堅石」や「伊豆石」と呼ばれて、江戸城の石垣用に大量に切り出されたほか、幕末維新期には品川台場や横浜港、横須賀製鉄所のドックの築造などに用いられました。



土屋大次郎氏肖像 個人蔵

その土屋氏が相州堅石を扱う事業を始めたのは、明治一〇年代（一八七七～一八八六）のなかば、彼が二〇代前半のころだったと考えられます。死後に出版された書籍におさめられた彼の評伝には、夜おそくまで働いて石材の注文・買い取りから積み込みまでを一人でこなし、石工や取引先からの信頼を得ていったという、若いころの仕事ぶりが紹介されています。

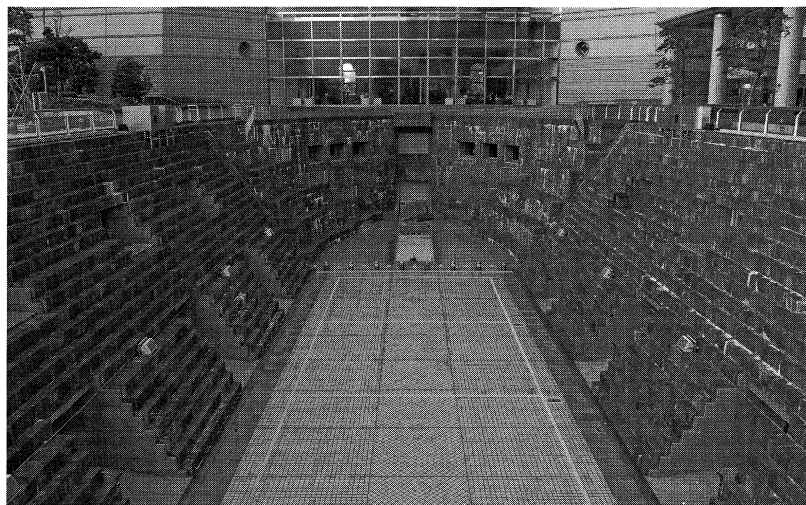
このような土屋氏の初期の事業活動を考える上で重要と思われるのが、陸軍との関わりです。彼は、少なくとも明治二三年（一八九〇）以降、陸軍省が東京湾要塞を建設するために、足柄下郡早川村（現小田原市）から静岡県賀茂郡川奈村（現伊東市）までの海岸に設定した石材採取場の監視役をつとめています。そして、そこで築いた陸軍との関係を足がかりとして、東京湾

要塞の各所に石材を納入していきま
す。このうち、千代ヶ崎砲台（明治二
八年〔一八九五〕竣工）への石材納入
について、神奈川県立公文書館が所蔵
する「土屋家文書」^{つちやけんもんじょ}で見えていくと、土
屋氏が「扇形石」^{おむぎがたいし}など三種類の石材を、

合計一二五〇円ほど納めて据えつけれ
と書かれています。「扇形石」は直径
約六メートルの砲床をふちどる安山岩
製の切石の^{きりいし}ことであると考えられま
す。筆者は砲台跡で現存する「扇形石」
を見たことがあります、その石質は
土屋氏がおもに取りあつかつていた相
州堅石と考えて違和感のないものでし
た。このことから、現存する砲床の石
材は、土屋氏が納入したものである可
能性が高いのではないかと考えていま
す。横須賀市西浦賀に現存する千代ヶ
崎砲台跡は保存状態が大変よく、平成
二十七年（二〇一五）に国の史跡に指定
されています。

次に、土屋氏が石材企業家としての
地位を確立させることとなったビッグ
・プロジェクトである、横浜船渠会
社のドック（船を修理する施設）への
石材納入についてご紹介します。みな
さんは、横浜・みなとみらいのシンボル
である横浜ランドマークタワーの足元
にあるイベントスペース「ドックヤード

ガーデン」をご存じでしょうか。こ
こが土屋氏の納入した石材で造られた
ドック「旧横浜船渠株式会社第二号船
渠」^{（明治二十九年〔一八九六〕竣工）}です。



旧横浜船渠株式会社第2号船渠（現在のドックヤードガーデン）

ワー建設の際に、位置を少しだけ移動
し、長さも一〇メートルに縮小しま
したが、土屋氏が納入した相州堅石の
石材は多くの部分が現存しており、平
成九年（一九九七）に国の重要文
化財に指定されています。

相州堅石事業での成功をベース
にして、土屋氏はその事業活動の
後半期の明治三十六年（一九〇三）
に茨城県西茨城郡西山内村稲田
（現笠間市）へ進出し、「稲田石」
と呼ばれる花崗岩^{かこうがん}の採掘・販売へ
と乗り出します。この時期には、
東京・横浜などでの土木・建築用
石材の需要が、箱根山周辺産の相
州堅石から稲田石などの茨城県産
花崗岩へとシフトしつつあり、土
屋氏もそうした時代の流れの中
で、徐々に稲田での事業に軸足を
移していくこととなります。

晩年の土屋氏は、政界へも活動
の舞台を広げていき、神奈川県会
議員と衆議院議員を歴任し、衆議院議
員在職中の明治四十三年（一九一〇）に
死去します。若くして事業を興し、そ
の事業を大きく広げて、最後は国会議
員にまでのぼりつめた、神奈川県^{（石}
材企業家の最大の成功者と言えるで
しょう。

真鶴の生い立ちと石

山下 浩之（神奈川県立生命の星・
地球博物館学芸員）

真鶴は箱根火山の一部であることは
ご存知でしょうか。真鶴を語るにはま
ず箱根火山を語らなければなりません。
石の紹介をする前に、箱根火山の
生い立ちを簡単に紹介します。

箱根火山は約四〇万年前から活動を
始めました。昔の説では初期の箱根火
山は富士山のような巨大な成層火山で
あったと考えられていましたが、最近
の説では小型の成層火山の集合体であ
ったと考えられています。例えば金時
山や明神ヶ岳、三国山など、それぞれ
が別々の火山で、噴火した時代や火山
を構成する溶岩の成分も少しずつ異な
っていたのです。二三万年前から一三
万年前にかけて、箱根火山の中心では
爆発的な噴火が繰り返して起こります。
この噴火によって、山体の中央には巨
大なカルデラが誕生しました。一三万
年前以降はカルデラの内側でのみ噴火
活動がおこり、より古い時代の浅間山、
屏風山などの前期中央火口丘と、より
新しい時代の神山や駒ヶ岳などの後期

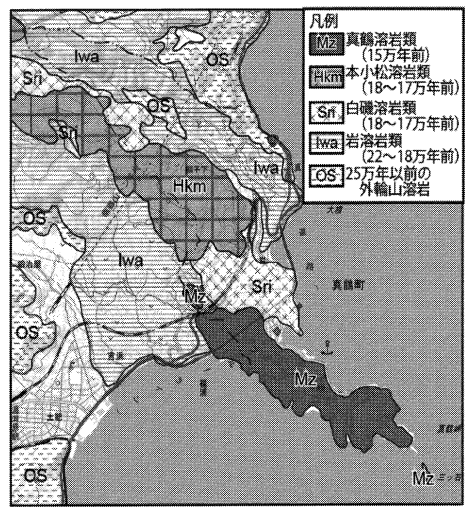
中央火口丘と呼ばれる火山が複数誕生しました。

真鶴の大地の生い立ちにとって重要なのは、カルデラができた二三万年前から一三万年前です。この時期、箱根火山の中央ではカルデラを形成した大量の火山灰を噴出する爆発的な噴火が起こりましたが、箱根火山の中心から見て、北西と南東方向では火山灰ではなく大量の溶岩を噴出する噴火が起こります。

この北西―南東方向で火山活動が起こるといえるのは、フィリピン海プレートがこの方向に押していることが原因です。箱根火山の南東方向とはまさに真鶴です。現在の星ヶ山から真鶴半島にかけて、三〇前後の噴火口が推定されていて、そこから流れ出た大量の溶岩によって真鶴が誕生するのです。なお、溶岩は高いところから低い方に流れます。真鶴半島には、お林をはじめ標高が高い場所がいくつかあります。つまり真鶴半島は、山側から溶岩が流れてきてきたのではなく、現在の場所で噴火が起きて誕生したのです。

では真鶴町を構成する溶岩を紹介しましょう。※図1は真鶴町周辺に分布する溶岩を示したものです。真鶴町を構成する主な溶岩は、古い時代のもの

から順に、岩溶岩、白礫溶岩、本小松溶岩、真鶴溶岩の四つです。



真鶴石質分布図 ※図1

ます。

本小松溶岩は、白礫溶岩と同じ一八〇一七万年前に噴出した溶岩で、いわゆる本小松石と同じです。本小松石の特徴は、溶岩には普通に見られる孔が少ない点にあります。溶岩には水蒸気や二酸化炭素などのガス成分が含まれていて、溶岩が固結する際にガスが抜け出ることと小さな孔がたくさんできるのですが、この孔が極めて少ないため非常に緻密に見えるのです。また、真鶴町に産する他の溶岩と比べて、二酸化ケイ素が多く含まれます。

そのため緻密な岩石名は、安山岩ではなく「デイサイト」という名称になります。

真鶴溶岩は、一五万年前に噴出した溶岩で、真鶴半島を構成します。本小松石と比較して、孔が多く、白い斜長石や黒色の輝石の結晶をたくさん含んでいます。岩石名は安山岩です。新小松石という石材名で採掘がされていました。

真鶴町の溶岩は、赤く焼けた岩溶岩、板状節理の白礫溶岩、緻密な本小松溶岩、結晶を多く含む真鶴溶岩と、それぞれ個性があります。いずれの石も昔から石材として、各々の個性を生かし

ながら使われてきました。その利用については前の原稿で、神奈川県立歴史博物館の丹治さんが紹介されています。

※図1 真鶴町周辺の地質図・地質図は日本地質学会(二〇〇七)を簡略化したもの。カラーでより大きな図面をご覧になりたい方は、箱根ジオパークガイド2「真鶴の地質、生物、歴史を満喫する」をご覧ください。

石から辿る真鶴の石材業

新井 人志(真鶴町教育委員会主査)

真鶴町内には、石材業の歴史を物語る様々な石碑や石材が残っています。それらをご紹介します。

① 江戸城用石(町指定文化財)



江戸城用石(刻印石)

これは鴟窟に残された、江戸築城に

用いるために切り出された石材です。採石にあたった各大名が所有を明確にするため、それぞれ固有の符号を石材に刻みました。町最古の村勢要覧である相州真鶴村書上ヶ帳(町指定文化財)には町内一か所の丁場のことが記載されていて、文中に「しとど」丁場の名がみえる事から、これらの石の存在により、この付近一帯が丁場であったことがわかります。

② 水戸殿石場の碑 (町指定文財)



水戸殿石碑

丸山丁場は、現在の真鶴の小田原百貨店付近一帯にあたり、この石碑も、この地域内にあります。丸山丁場が、徳川御三家の水戸家の手による採石がなされた事を示す重要な資料といえるでしょう。

③ 石工先祖碑 (町指定文財)

真鶴町役場の北側、大下の道祖神の左手にある急な階段をのぼりきったと

ころにこの石碑があります。

岩地区の石材業の開創者とされる土屋格衛と、その後、筑前から来た七人の石工を石材業中興の祖として称えるためにこの碑が設置されました。

石碑の正面に向かって右側面には、その七人の石工たちの名前が刻まれています。また左側面には建立した人物たちの名前が刻まれています。

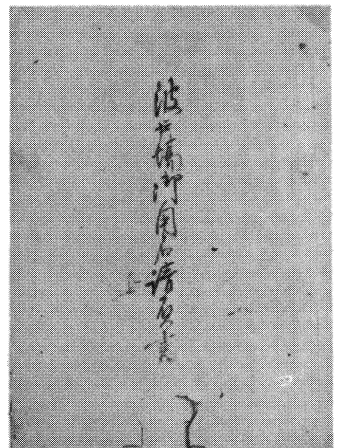
この碑は、最初は文明年間に建立されましたが、後に崩壊し、寛永一二年頃に再び建立されたものの、嘉永地震で再び崩壊、現在のものは、安政六年(一八五九)に再建されたものです。

先祖碑の横には、七基の石塔があり、それぞれ中興の祖の七人の石工のものと伝えられています。



石工先祖碑

④ 波戸場御用石請負書 (町指定文財)



波戸場御用石請負書

安政五年(一八五八)にアメリカ合衆国等五か国と日本との間に通商条約が締結され、これに伴い横浜も開港となり、野毛新田の埋め立てや波戸場の建造が行われました。これらの築材として、真鶴からも多くの石が搬出されました。この文書は、その一端を示すものです。石材の大きさと値段は記載

されていますが、数量の記載はありません。それが記録出来ないほど、出来るだけ多くの数量の提供を要請されていたと考えられます。

⑤ ハートストーン



ハートストーン プロジェクト

当町では、令和元、二年と二か年の計画で、小松石を使った作品を、町の各所に設置する石の彫刻祭を開催いたします。

令和元年度は、約二か月の間、各出品作家が当町に滞在し、公開制作を行いました。

これは、その中の一作で、富長敦也さんによる小松石を使ったもので、岬にあるケープ真鶴の建物の隣に設置され、公開制作として、毎週末に、多くの方々とともに磨きあげるといいうイベントを通じて作り上げたものです。

文化財トピックス

民俗資料館の

開かずの金庫が開きました！

昭和六一年（一九八六）より土屋家から土地、建物をお借りして運営してきた真鶴町民俗資料館ですが、この度、令和元年七月三一日に、土地・建物ともに町が購入をいたしました。

これで資料館の中に展示、収蔵している資料とともに施設自体も町の所有となりました。今後は、地域の歴史、民俗、伝統文化等を知ってもらうための拠点施設として整備していきたいと思います。

また今回、土地・建物の購入と併せて資料館の内部にある備え付けの古い大金庫を土屋家より寄贈いただきました。

この大金庫は、昭和六一年の開館時より、鍵及びダイヤル番号が不明で、土屋家でもそれをご存じなく、そのため、これまで開かずの金庫となっており、中に何が入っているのかもわからない状態でした。

しかしテレビ東京の番組の「開か



開錠の様子

ずの金庫を開ける」のコーナーでこの金庫を取り上げていただくこととなり、無事に開ける事ができました。土屋家の文書等の歴史資料が入っていることを期待したのですが、開けてみたところ、なんと金庫の鍵が一束入っていました。いったいこの鍵の正体は何なのでしょう。そして誰が何のために入れたのでしょうか。また新しい謎が出てきました。

この番組の放映により、この資料館と土屋家、町の石材業の歴史について、多くの方々に知っていただくよい機会になったのではないかと思います。

文化財審議委員会

研修視察報告

・視察日

令和元年11月27日（水）

・視察地

真鶴町内

丸山丁場跡、石材業関係史跡

小田原市内

神奈川県立生命の星・地球博物館

・参加者 町文化財審議委員三名

事務局（町教育委員会）

今年度の文化財審議委員会県内視察

は、真鶴の石材業に焦点を当て行いました。

今回の視察では、県内の石材業の歴史を研究されている県立歴史博物館の丹治雄一学芸員と、箱根を中心に県内の石質分布の調査を行っている県立生命の星・地球博物館の山下浩之学芸員に同行いただきました。

午前中は、真鶴町民センターの敷地内にある江戸城用石を見学。これは、町内から出土したものをセンター内に移設したもので、町の石材業の歴史を示す重要な資料であります。

さらに町民センター近くにある「水戸殿石場の碑」と小田原百貨店の駐車場に

隣接した土地に残る丁場の痕跡を確認しました。

その後は、町役場の北側の住宅地に残る「石工先祖の碑」と、この碑で顕彰されている七人の石工の石塔を見学しました。

「石工先祖の碑」を見学した後は、鴉窟に移動しました。この付近は、「相州真鶴書上ケ帳」に記載されている「しとど」の丁場があった場所とみられ、鴉窟の敷地内にも江戸城の用石が残されています。また同じ場所にある「品川台場礎石」も併せて見学しました。その後、竹林石材の竹林智大社長に同行いただいて、竹林石材の丁場を案内いただきました。



竹林石材丁場見学

ここでは、現在の丁場の様子を見させてもらうとともに、石材業の現況について詳しくお話を伺うことができました。

かつては、爆薬をしかけて採石を行っていたことが、危険が伴うことと、騒音が起ることに伴い、現在では重機による採石を行っていることを伺いました。

石材業の現況としては、日本式の木造住宅の建築が減り、石垣を築かない家が増えたことと、墓石の需要も減ったこともあり、バブル期の最盛期に比べると、石材の需要は半分ほどに落ち込んでいるという話をされました。

真鶴の基幹産業である石材業が今後でも存続していくために、様々な課題があることを感じました。

午後からは、小田原市内に移動して、県立生命の星・地球博物館で山下学芸員による一時間ほどの講話「真鶴半島の石質と分布について」を伺いました。

講話では、まず箱根火山の成立について、形成過程の話を伺い、火山の噴火口や時代の違いによって、火成岩の成分割合が異なり、それに伴って火成岩の種類が異なること、その結果、箱根やその周辺も様々な火成岩が分布していることの話伺いました。

真鶴半島も、異なる火山の噴火により、3つの溶岩グループに分類されることなど、貴重な話を伺うことができました。



講話の様相

講話のあとは、普段は見ることができない館のバックヤードを山下学芸員の案内で見ることができました。その中には、石の組成を分析するための専門の部屋があり、様々な機械が設置されていて、そこで各岩石の構造等を調査できるとのことでした。一般の方から珍しい岩石が持ち込まれて、その分析を受けることもあるということです。そのあと、生き物を解剖するための部屋、また解剖したものを標本にする

ための部屋等を見させてもらいました。次に、県内でも屈指の規模をほこる同館の収蔵庫を見学させていただきました。

最後は、同館の常設展示を見学させていただきました。ここでは、地球の成立時期の岩石や、県西地域の石の種類等の展示を見ることが出来ました。今回の研修視察では、あらためて町の石材業の歴史について肌で感じる事ができました。

また県立生命の星・地球博物館での講話と見学を通じて、真鶴の石の成立の過程を知ることができ、真鶴の石について多角的に見ることが出来る意義なものとなりました。



神奈川県立生命の星・地球博物館前にて

令和元年度文化財保護事業

◎文化財審議会定例会 年三回開催

◎文化財審議会 県内視察

◎文化財広報啓発事業

・文化財だより第三十二号発行

・町民センター展示事業

歴史を語る（石器・土器）展

（H31 4月～R元 6月）

幼稚園・学校の歴史展（6月）

三宅克己展（7月～9月）

出口佳子展（9月～10月）

真鶴の石材展（10月～12月）

瀧門寺展（R2 1月～3月）

・民俗資料館展示事業

端午の節句展（H31 4月～R元 5月）

貴船まつり展（6月～8月）

土屋家書簡展（8月～11月）

お正月展（11月～R2 1月）

桃の節句展（2月～3月）

◎文化財保護事業

国指定重要無形民俗文化財

・貴船神社の船祭り保存管理奨励交付金

・貴船神社の船祭り小早船改修事業補助金

町重要伝統文化行事

・岩見子まつり並びに岩地区夏まつり

（灯籠流し）に保護奨励交付金